

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	(第2章)シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演(1): ナントの文化的・都市計画的アイデンティティとなったセノグラフィ
<b>Author</b>	Gangloff Emmanuelle, 高田 裕輔[翻訳]
<b>Citation</b>	URP「先端的都市研究」シリーズ. 24巻, p.5-16.
<b>Published</b>	2021-03-15
<b>ISBN</b>	978-4-904010-39-6
<b>Type</b>	Book Part
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学都市研究プラザ
<b>Description</b>	創造都市における文化プロジェクトと担い手育成: フランス・ナント市と京都市を例に
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20210427-005

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

## 第2章

### シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」

#### 基調講演①：ナントの文化的・都市計画的アイデンティティ

#### となったセノグラフィ

Emmanuelle Gangloff（翻訳：高田裕輔）

#### 1 はじめに

私は、ナントにおける文化と都市計画のつながりについて発表したいと思います。これは、私の博士研究のテーマでもあります。「セノグラフィの手法が都市へと拡張される時」という題で論文を執筆しました。研究のフィールドはナントでしたが、ナントを選んだ理由は、「都市のセノグラフィ（scénographie urbaine）」と呼ぶべき取り組みがそこで展開し、この取り組みが都市の生成に影響を与える様を観察することができるからです。都市空間でのセノグラフィの出現は、都市の生成の新しい過程と捉えることができるのでしょうか。また、文化の分野と都市計画の分野がどう交差しているのか、一時的なプロジェクトが都市の生成に対しどのように永続的な変化をもたらすのでしょうか。この二点がこの研究に際しての問題意識でした。

研究は、ナント国立建築大学とアンジェ大学の共同プロジェクトの枠組みの中で実施しました。現在の私の立場についても軽く触れたいと思います。現在、私は都市計画、地域整備そして文化の分野の研究をしています。関心領域は、都市の生成、物語性、イベントに及んでいます。また、フランス内務省が立ち上げた国家プロジェクト「コロナ危機で社会がどう変容したかに関する調査」の中の都市の生成に関するプロジェクトの責任者を担っています。



写真 2-1 オンラインシンポジウムの様子(youtube 配信画像)



写真 2-2 講演スライド①,②

## 2 舞台都市ナント (写真 2-2)

私は都市、公共空間、そして公共空間を都市圏レベルで捉えることに関心を持って研究を進める中で、すぐにナントが興味深い調査地であると気付きました。それは次の二つの理由によります。一に、大規模な文化政策が30年以上に渡って展開されていること、二に一時的なアートの実践が都市圏の変革の核となっていることです。公共空間にアートを一時的に展開させることが、都市のアイデンティティの変化や、都市計画の手法の変化といった、都市の生成のベクトルに関わる要素に影響を与えているのです。

都市の空間、公共の空間、イベントの空間といった空間の重ね合わせの中で、解説すべき多くの論点がナントでは見受けられます。それは、セノグラ

フィの技術が一般的な美学の視点から扱われる側面を超えて、より広範な都市開発の問題に直面しているということです。私はナントという都市の生成について三段階の変化を指摘したいと思います。三つの段階は、アートの世界に留まっていたセノグラフィが、都市の分野へ展開していく役割の広がりに対応しています。現在、ナント都市圏で過渡期の都市計画（urbanisme transitoire）など文化プロジェクトの発展が顕著に見られますが、これは一時的な空間構想が、都市空間整備の問いと徐々に融合するようになった結果です。

### 3 ナントにおける舞台都市化の3段階の発展（写真 2-3）

ナントにおける舞台都市化の三段階の発展について紹介します。第一段階は、路上アートの芸術家たちが牽引することで、芸術家たちが理想郷を胸に抱きつつ、都市の架空の物語を作り出した時期です。1990年代、ナント市はアートの実験を展開しました。Royal de Luxe（ロワイヤル・ド・リュクス：編者註、第4章参照）に代表されるアーティスト達が都市を360度の舞台と捉えたアートの実践を行いました。この360度の舞台というのは、Michel Crespin<sup>1</sup>の言葉を借りたものです。都市に対しての新しい見え方をもたらす方法としてアート体験は評価されることとなります。

第二段階は、アーティストの手法を学んで制度が整えられる段階です。様々な文化の担い手がこの流れに追い付き、公共空間での活動を増加させました。各自のやり方でイベント空間が運営され、上演される中で、文化イベントに含有される雰囲気、都市に浸透していきます。

第三段階は、アートがナントの人々にとっての生活の一部となった段階です。アートに没入する体験が積み重ねられていく中で、使い手だけでなく住民、観光客も含めた様々な人々との関係性が重視されるようになります。空間の持つ意味を管理することが必要となり、オリジナルな都市の雰囲気

---

<sup>1</sup> ミシェル・クレスパン（1940-2014）。フランスの演劇人、舞台や公共空間のセノグラフィを手掛ける演出家、思想家、イベントデザイナー。

## CONTEXTE : Nantes, une ville scène

### Trois temps du projet

- Phase 1 : Utopie avec des artistes à l'initiative
- Phase 2: Institutionnalisation avec des phénomènes d'apprentissage
- Phase 3 : L'art comme mode de vie à la Nantaise



写真 2-3 講演スライド③

気とは何かが問われます。

このような変化の中で、都市のセノグラフィの手法を用いて都市の生成を志向する新たな行動様式が生み出されました。そこでは、イベントを都市の日常の中に存在させるために空間を管理することが不可欠となります。ナントは文化イベントを発展させていく中で、「見られる舞台としてのまち」であったのが、「住まう舞台としてのまち」になり、やがて「ともに作り出す舞台としてのまち」へと変化して来たのです。

#### 4 都市のイメージを変えるために、都市の物語を作ること

ナントでは造船所が閉鎖された後、どのように都市再生を行うか問われ

ました。徐々に、路上を舞台とするアーティストたちによって、使われなくなった産業遺構が不定期に使用されるようになります。アーティストは都市に対する新しい見方を提示します。散発的に現れるショーやイベントの時間に都市が舞台となり、芸術的な表現が付け加えられることで、街は別のものへと変わります。街はアーティストの物語を支える存在となります。このようにちょっとした瞬間の積み重ねが、日常空間を純粋な機能の面から見ていた人々を解き放ちます。Les Allumées（レ・ザルメ：編者註、第4章参照）のような芸術祭やアーティストのインスタレーションは共通の記憶を作り、その都市特有の物語を構築するのです。

ロワイヤル・ド・リュクスは、路上演劇 *La saga des Géants*（編者註：「巨人の伝説」、第4章参照）を通して、都市の物語の担い手となっていきました。芸術家だけではなく文化活動や都市計画の関係者たちも、パフォーマンスによって生まれたイメージを固定化し、象徴的な要素を掛け合わせることで、都市の詩的な時間の記憶を永久に残そうと試みるようになりました。ナント島に常設の施設であるマシン・ド・リルが作られたことは、一時的なものが恒久化した代表例と捉えられるでしょう。機械仕掛けの象は様々な場所で活躍し、最終的には都市の新たな象徴となります。新しい無形遺産が展開されたのです。同じ過程が、*Le Voyage à Nantes* という芸術祭でも窺えます。例えば、ロワール川沿いに設置された作品“*Les Anneaux de Buren*（「ビューレンのリング」）”をはじめとし、芸術祭で展示された数多くの作品が現在のナントの景観を語る上で欠かせないものとなっています。

文化セクターの関係者たちは、自分たちの住み慣れた劇場やギャラリーの“壁”を乗り越え、都市の中でイベントを企画し、人々の中に飛び込んで行きました。彼らは公共空間での活動を通して都市の共通の物語を生み出す過程に加わり、都市の生成に貢献します。都市計画家たちもまた、イベントの企画者となり、過渡期の都市計画のプロジェクトを後押しします。ナント、とりわけナント島では、都市の荒地地となっていた産業遺構が「占拠」されることで、人々は地域が変わり都市が建設されていく過程を目にするようになりました。一時的な空間の設置は本質としてコミュニケーションの価値を持つのです。このような文化プロジェクトによって都市性が作られ、都

市の新たなイメージが形成されるのです。

今日、ナントでは、感覚の空間と機能の空間との間で、都市の物語が作り出されています。アーティストたちの動きに啓蒙されて、行政官や開発者は都市計画にも文化にも根を持つ機能を掛け合わせるようになりました。物語作りは、アーティストだけによって担われるものではなくなっています。都市そのものも、物語の担い手となりつつあり、アーティストは肉付けのために動員される側にまわっています。都市的行為と文化的行為が同時に行われています。このことは、住民に与えられる役割を更新して行きます。観客であると同時に、担い手でもあり、作り手でもあるものへと変わってきています。

## 5 公共空間のセノグラフィ的管理と、都市の運営に於ける新しい技能(写真2-4)

アーティストの紡ぐ物語は、都市のイメージの生成に寄与します。様々な地方公共団体がこのノウハウを学び、定着化させるために模索を行なっています。文化セクターの関係者は、公共空間を活用する手法を多様化させました。彼らは、都市と様々な芸術的提案の間を取り持つ役割を果たしています。そしてそれに留まらず、彼ら自身も公共空間でのプログラムを企画するようになっていきます。文化セクターだけではなく、市の全ての部局がこの問題に敏感になっていると言ってもよいでしょう。現在、ナント市の緑地環境局は仲介役を果たすとともに、自身も公共空間でのプログラムを企画しています。さらに、イベントが開催されることを踏まえた空間コンセプトの設計や、開発時に都市の物語を参照するような視点を持つようになっていきます。緑地環境局のイベントにおいても、試行的に空間をつくり、使われ方を実験し、与えられた時間の間空間に活気を与えるセノグラフィの視点がとりいれられています。

ここで文化イベントの企画者は、都市の演出家=セノグラファーとしての機能を果たしていると言えます。セノグラフィの技法を都市に応用するこ

## ANALYSE / une gestion scénographique de l'espace public



2004, Jardins à David Pezobrau, Les Fenêtres

Les fonctions scénographiques :

- rapport au réel/ fiction
- gestion espace/temps
- relation œuvre/public

### • L'acquisition de savoir-faire



2008, Le Espace-Lavoir Quai Cuvier, Les Fenêtres

### 写真 2-4 講演スライド④

とで、より感覚に基づいたオリジナルな都市を創造する想いを持った、都市づくりの新しい手法がもたらされることとなります。都市の演出家は次の三つの役割を担います。一に、現実と物語との間の仲介役として都市を語り、その語りを地域に落とし込む役割です。二に、空間と時間との間の仲介役として一時的なイベントを管理しながら、日常の都市の機能との調整を行う役割です。最後は、作品と人々の間の仲介役です。

## 6 一時的な取り組みを恒久化し、実験的取り組みを制度化する（写真 2-5）

これまでナント市では、アーティストの公共空間での活動展開を支援し、活動の促進を行う体制が整えられてきました。また、一時的なものを恒久化



## ANALYSE / un processus d'expérimentation qui s'institutionnalise



Trévoux, Aurélien Bory, La Voyage à Nantes

Evolution des publics visés,  
quelles implications pour l'habitant ?

Pérennisation et phénomène de  
routinisation



写真 2-5 講演スライド⑤

させようとする動きも見られ、都市の生成の様々な関係者が一時的な手法を試行し、それを継続させる可能性の検証が行われています。

市の機関はイベント企画に慣れてきましたが、ここで注意しなければならないのは、アーティストの居場所を確保し続けるということです。というのも文化イベントが制度化していく過程で行政が演出家の役割を担ってしまうと、セノグラフィの持つ一時性・実験性が失われ、行き詰まる可能性があるからです。考えられる危険性は、緊張感を生み出すアーティストが不在の中で取り組みが進められることです。我々がアーティストに求めていたはずの摩擦や衝突が欠けると、都市づくりのプロセスから芸術的な創造性が遠ざけられ、ディズニーランド化する中で損なわれ、最終的に本質的ではない試みに堕ちてしまう可能性があるのです。

## 7 対象となる大衆の変化。住民にとっての関与とは。(写真 2-5)

また、住民とアートの関係も変化します。住民はアートとの関わり方を様式化し、アートからの眼差しに慣れていきます。まちの中にアートが溢れるということは、ナントの人にとって、アートが生活の一部になるということです。しかし、この手法には問題もあります。作品と人々と地域との関係について投げかけられた問いは、作品の存在が当たり前になる中で消えてしまう可能性があります。公共空間に風変わりな作品や芸術的な提案が遍在することで、人々と作品の間の緊張関係が和らぎ、作品が日常生活の中に埋没してしまう可能性があります。対象となる人々の増加の中で、住民の関わり方について新たに問うべき段階にきています。

## 8 継続する一時性。地区を事前形成するための過渡期の都市計画プロジェクト (写真 2-6)

文化イベントを考慮しつつ、都市空間をセノグラフィによってマネジメントしていくことは、今や地域開発や都市計画の手法の一つとなっています。数年前から、Transfert (トランスフェー：編者註、第4章参照) に代表される文化的都市計画、すなわち過渡期の都市計画プロジェクトが、ナントの様々な地区で展開されるようになりました。これらのプロジェクトには、かつて都市の荒地地であった現在開発中の空間などが用いられ、文化イベントや活動を通して物語が生成される中で、将来の都市整備の可能性が示されます。ナントが今考えなくてはならないことは、どのように物語を更新するか、そして新しい都市性を地域に積み重ねていく手法をどのように作り出すかです。

## ANALYSE / Vers des projets d'urbanisme transitoire/culturel pour préfigurer des quartiers



Des projets tels que « Transfert »  
se développent



La Cobra, avenue de Transfert



2018, Transfert rue du Loif

写真 2-6 講演スライド⑥

### 9 おわりに：アーティストは都市を開かれた舞台にするための中心的な存在と言えるのか？（写真 2-7）

まとめると、ナントの事例が教えてくれることは、アーティストが都市の生成に組み込まれるためには、都市計画と文化政策の双方の分野でのやり方を変える必要があるということです。そのために必要なプロジェクトは地域によって異なります。何故かという、方法や過程が都市の歴史と深く関わってくるからです。ナントの事例はまた、実践が制度化されてしまうというある種の限界も示しています。具体的に言えば、提案が全て同じようなものになってしまう危険性です。また、*le Voyage à Nantes* の文化芸術プロジェクトはナントの人にナントを再発見してもらいたいという想いのもと生



写真 2-7 講演スライド⑦

まれたものですが、現在では世界的な都市間競争という文脈と、住民をどう巻き込んでいくかという文脈の中で、対象となる観客は誰かという問いが生まれています。

疑いなく言えることは、都市の未来を考えると最大の論点の一つが、都市それぞれが個性を持つためにアーティストを中心に据える方法を考えるべきだということです。もしセノグラフィがアーティスト以外によって担われる場合、芸術的な創造性を軽視する傾向がわかってきました。空間のセノグラフィを用いた運営は、アート創作を重視する開かれた舞台としての都市圏の環境を作り出しますが、もしセノグラフィが日常化し、反復に陥った時、また公共空間の中で見えにくいものとなった時に、舞台は死んでしまうでしょう。都市の空間は、機能的な場であるとともに、都市性の生成に

必要な、共有と共生の空間の出現に貢献するものでなくてはなりません。

芸術的創造によって具現化された舞台が存在しなくなってしまうと、舞台は偽物のデコレーションとなり、遺物化してしまうでしょう。ナントの事例が教えてくれることを再度強調しますと、都市計画と文化プロジェクトの融合こそが、都市性を作り出し、独自の雰囲気を作る源となり、魅力の発信源となるのです。今、コロナ危機が世界を覆っています。我々の公共空間との関わり方にも影響が出て来ています。この危機の時代に、都市が開かれた舞台であり続けるための手法をどのように維持していけば良いでしょうか。